

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：34430

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13047

研究課題名（和文）西日本諸方言の敬語運用に関する対照方言学的研究

研究課題名（英文）Contrastive dialectological research on honorific usage in various dialects of Western Japan

研究代表者

酒井 雅史（SAKAI, Masashi）

桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授

研究者番号：20823777

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：敬語形式の多さや使用が活発であることが指摘されてきた西日本の中にあつて、有標形式の使用率という点で関西方言内で認められる地理的連続性が、関西以北（福井・石川・富山）および以東（岐阜）には見られない。関西以西の方言では、山陽および四国地方でも地理的連続性が認められない一方、日本海側の地域では地理的連続性が認められる。各地の方言で使用する敬語形式との関連も一部窺われるものの、ことばをどのように用いるかは語形の伝播・受容とは必ずしも同じではないということが示唆されたことが本研究の主な成果の一つと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、日本語の地理的変異がどのように形成されていくかといった問いに新たな知見を提供し得るものである。また、これまでどのような言い方をするかといった観点から議論されてきた当該分野に対して、ことばをどのように用いるかといった観点からの議論へと発展させることのできる資料を提示したものと位置づけられる。

特に、人間関係のありようを反映するとされる敬語形式の用い方に関する分析の結果は、日本国内にとどまらない多様な文化的・社会的背景を持つ人々との交流の中で、普段のコミュニケーションの在り方が異なることを理解するための一助となるとも考えられる。

研究成果の概要（英文）：It has been pointed out that Western Japanese dialects often use honorific forms. However, the details of the use of honorific language, such as the rate of use of honorific forms, were not disclosed. In this study, we found that there is no geographical continuity in the usage rate of this honorific form north of Kansai (Fukui, Ishikawa, Toyama) and east of Kansai (Gifu), as well as in the Sanin and Shikoku regions west of Kansai. It was revealed that there is geographical continuity between the Sanin regions.

This result suggests that how honorific forms are used is not necessarily the same as how they are disseminated and received, and can be considered one of the significant results of this research.

研究分野：方言学

キーワード：方言敬語 敬語運用 地理的分布 対照方言学

1. 研究開始当初の背景

これまでの方言敬語に関する研究では、敬語形式の地理的分布と特徴的な運用が個別に指摘されてきているという問題があった。具体的には、西日本ではナサルに由来する形式が分布し、地域によってその他の方言形式を用いるところがある一方で、東日本では首都圏と東北の一部を除いて敬語形式があまりないという分布になっている。すなわち、西日本方言は東日本方言に比べて複雑な敬語形式の体系を持っていることが知られている。一方、敬語形式の用い方(運用)の特徴については、ソトの人物を聞き手としたとき、話し手の身内にも尊敬語を用いる「身内尊敬表現を持つ方言域」かどうかといった大まかな区画がなされている。

方言の敬語に関する研究は多くの蓄積があるが、上記のものも含め、これまでの先行研究では、敬語形式の地理的なパリエーションの様相と特徴的な運用が個別に指摘されてきているという問題があった。

2. 研究の目的

上述の問題を踏まえて、本研究では、西日本諸方言の敬語運用の特徴と方言間の影響関係(伝播による受容と変化のありかた)を対照方言学的観点から明らかにすることを目的とした。すなわち、(A)方言の敬語運用は、包括的な記述に基づいて比較・対照した場合、地理的な影響関係が認められるのか、(B)(A)の記述を行う際に用いてきた共通の枠組みは、(方言)敬語を用いない地域にも適用可能なのかという2点を明らかにするべく研究を進めた。

これまで、ことばの伝播とそれに伴う受容・変化といった議論は、アクセントなどの音声面や語彙に関する分布を中心に論が展開されてきたといえる。語彙の伝播は比較的単純であるのに対して、人間関係を表す敬語は異なることが予想される。これまで研究されてきた方言以外の方言を対象とするとともに、精緻な記述を進めることにより、ことばの伝播を論じる際には扱われてこなかったことばの運用に関する方言間の地理的な影響関係を明らかにすることを大きな目的とした。

また、昨今、どのように方言が形成されるのかといった方言の形成に関する議論が活発に行われるようになってきている。方言形成論について議論が深まりを見せていく中で、敬語をどのように用いるかに関する地理的な分布を明らかにすることは、形式や一部の特徴的な運用の分布から読み取れるこれまでの方言形成論に新たな知見を提供することも目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、対象となる地域でフィールドワークを行い、聞き取りによる敬語体系の記述と、敬語運用を分析するための会話データを収集し、その会話データの分析をもとに、敬語運用の地理的な影響関係を明らかにするといった方法をとった。

方言の会話資料にはいくつかの既存資料もある。しかし、そこに収録されている会話内容は必ずしも統一されているわけではない。また、統一的手法で集められた録音資料はあるものの、その分量は敬語運用の体系を記述するためには不十分または不揃いな状況にある。これら諸資料に関する分析も並行して行った。

研究の計画段階では、あらかじめ選定した方言および本研究で分析を進めていく中で必要と判断された地域に赴き、調査を行う予定であった。しかし、研究開始とともに新型コロナウイルス感染症の影響により予定していた隣地調査を行うことが困難となった。そのため、本研究期間では、「会話データを用いた敬語運用の包括的な記述に基づく地理的分布を明らかにする」という目的を達成すべく、既存の諸談話資料をデータとして分析を行った。

4. 研究成果

敬語形式の多さや使用が活発であることが指摘されてきた西日本の中であって、有標形式の使用率という点で関西圏内に認められる地理的連続性が、関西以北(福井県方言・石川県方言・富山県方言)および以東(岐阜県方言)には見られない。関西以西の方言では、山陽(岡山県方言・広島県方言・山口県方言)および四国(徳島県方言・香川県方言・愛媛県方言・高知県方言)にも地理的連続性が認められなかった。一方、日本海側の関西以西の方言(鳥取県方言・島根県方言)では関西北部からの地理的連続性が認められる。

上記の敬語運用に見られた地理的連続性の在り方は、いずれの敬語形式が各方言において用いられているかとの関連も一部窺われた。すなわち、関西圏と同じくナサル系統の敬語形式が用いられている方言には地理的連続性がみられ、関西圏内で地理的連続性がみられる(ヤ)ハル系統とは異なるツシャルや(ラ)レルなどが用いられる関西以北・以東の方言には地理的連続性がみられないという具合である。ただし、この各方言で用いられる敬語形式と敬語運用の地理的分布状況は必ずしもすべての方言間において確認されるものではなく、山陽地方の方言および四国方言にはこういった関連性は見受けられなかった。このことは、ことばをどのように用いるかは語形の伝播・受容とは必ずしも同じではないということが示唆されたことが本研究の主な成果の一つと考えられる。

なお、最終年度に隣地調査を行えた地点はあったが、研究期間終了までに成果報告を行えるところまではデータ整備・分析は行えていない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 71
2. 論文標題 読みがたりむかし話資料にみる四国方言の敬語	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 甲南国文	6. 最初と最後の頁 左88-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 6
2. 論文標題 『全国方言資料』にみる尊敬語の分布	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 6
2. 論文標題 対照方言学的観点からみた存在表現の歴史変化の様相	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青木博史、小柳智一、吉田永弘（編）『日本語文法史研究』	6. 最初と最後の頁 83-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 70
2. 論文標題 読みがたりむかし話資料にみる近畿周縁部方言の敬語運用素描	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 甲南国文	6. 最初と最後の頁 左39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 69
2. 論文標題 読みがたりむかし話資料にみるアスペクト形式の分布	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 甲南国文	6. 最初と最後の頁 左2-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 68
2. 論文標題 読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 甲南国文	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 酒井雅史
2. 発表標題 日本語諸方言の敬語運用とその地理的分布
3. 学会等名 NINJALシンポジウム 「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------